

幼児のリトミック教育に関する基礎的研究

— リトミック指導と人間関係の広がりを中心として —

高橋 敏 唯 ○ 神 原 雅 之

(見 真 幼 稚 園) (広島文教女子大学)

1. はじめに

リトミックは、スイスの音楽教育家・作曲家であったエミール・ジャック＝ダルクローズ (Dalcroze, E. J., 1865～1950) によって創案された音楽教育法である。この音楽と身体の動きを融合させた教育は、感覚的な能力の覚醒や創造性の伸長を目指したものである。加えて今日、この教育の持つ特性は、単に音楽的な表現の枠に留まらず、運動やその他の科学的な領域でも求められるところの、学習の基盤となる諸能力の覚醒に深く寄与しているとする見方に支えられ、幼児期の教育はもとより舞踏教育や障害児教育など幅広い分野から注目されている。これまでのリトミック研究の内容は、音楽構成要素を軸とした指導方法に関する研究が主とされてきた。つまり音楽的感性を刺激し、より積極的な表現能力の拡大にウェイトがおかれることになる。もちろん、その指導の視野には、常に全人的な成長を含むものである。つまり、他者の表現を受容し、自己表出を行う過程で得られる共感体験は、人間教育としての意味を十分に内包している。しかし、これまでのリトミック研究の中では、その指導の過程でみられる人とのかわりに焦点を当てた報告はあまり見られない。

そこで本研究では、幼児のリトミック指導にみられる人間関係の変容に着目し、観察調査を行った。そこから幼児期における望ましい人とのかわりを育て、高めていくためのリトミック指導について一考察を加える。

2. リトミックにおける人間関係育成の視点

コミュニケーションを成立させるために、我々は、言葉を始めとし、身振り、手振り、顔の表情など様々な表現媒体を駆使する。特に幼児は、意志の表出に際して、言語的な未熟さをカバーするために、これら身体的な動きが想像以上に重要な役割を果たす。このように、内的感情の発露は身体動作によって結合されるというのが幼児の表現形式の一つの特徴である¹⁾。ブルナー (Bruner, J. S.) が、行為的表象 (enactive) は映像的表象 (ikonic) や象徴的表象 (symbolic) に優先するとした由縁とも言える。このように、幼児の身体的な動きは自己表出の手段として最も源初的であ

り、学習のスタートとして位置づけられる。言い換えるならば、ヒトは物事の本質を最初から記号化 (言葉や音符など) されたものとして受け止めるのではなく、まずは五感 (視覚・聴覚・触覚等) を通して感覚的・知覚的に刺激を受け止める。そこでは同時に、情動的な体験を併せ持つというのが特徴的である。この情動の付与された筋肉運動感覚的 (kinesthetic sense) な能力は、その後の様々な学習のベースとなる。感性の伴わない知識や情報が、実質的な意味において説得力を持たないのは周知の通りである。こうした感性によって支えられた意志とその反応の一致・調和を図るのもまた身体運動の大きな役割と言える。

リトミックにおける音楽と動きの融合は、こうした考え方に基づくもので、音楽の技術・知識の獲得に先んじて、音や音楽の原体験、つまり音に対するイメージや音楽の情動性を身体運動を通して感得しようとするものである。併せて、リズムカルな動きは、身体的なリズムの発見、身体四肢の制御、空間的認識の高まりなどの能力の拡大に有効なものである (Ayes; 1983, Frostig; 1978, 川村; 1984・1987)。これらの諸能力は、その延長線上に位置づけられるところの、自己意識の確立と他者との様々な人間関係の理解、そこでのダイナミックな人間関係をコントロールする力 (統制力) などの基盤となる能力である^{2) 3)}。すなわち、リトミック教育の過程には、幼児の集団社会における原体験的営みが豊富に内包されているというのも見逃せない点である。

3. 調査の方法

1) 調査日時: リトミック指導の観察は、'88年5月、6月、11月に行った。また、比較資料として「家庭での遊びの姿に関するアンケート調査」、そして屋外における遊びとして「砂場遊びとアスレチックでの遊び」を観察調査した。

2) 観察対象児: 対象児の選定は、望月・川原の研究⁴⁾を参考にさせて頂き、あらかじめ「リーダー的な子」「孤立的な子」「受動的な子」の3つのタイプの

表1 観察対象とされた幼児の人数及び年齢

	リーダー的	孤立的	受動的
4歳児	6	6	6
5歳児	6	6	6

幼児が選ばれた。この選定は、幼児の性格を熟知している保育者の合議によって行われた（表1）。

3) 観察者：観察チェックは、日常の保育場面の状態で行われた。そして、幼児にとって違和感のないようにとの配慮から園内の複数の教師が行った。また、指導は通常の保育の雰囲気を極力保つように心がけた。観察者は保育に支障がなく、しかも観察対象児が充分に見届けられるところに位置し、幼児への働きかけは必要最小限にとどめた。

4) 調査に使用した指導案と観察チェックの方法：調査園では、教育の重点目標の一つに“音楽性の芽を培う”ことを掲げ、年間を通して様々な遊びの中での音楽的体験の場作りを積極的に推進している。本調査で用いた指導内容は、年間指導計画の中から抽出したものである。指導案は、導入－展開－整理の構成（約30分）で組まれ、その中にはあらかじめ、ペアになったり、数人組になったりするグループ活動を10回以上挿入するようにした。

観察者は、あらかじめ決められた観察対象の幼児の他児との関わりを、観察チェック用紙⁵⁾に記されている項目（「遊びの姿」「協調性の姿」「ぶつかり合いの姿」その他）に従って、5分間隔で記録した。

1. 結果と考察⁶⁾

観察の結果、リトミックにおいて「没頭して遊ぶ」姿は他の遊びと比較し、決して少ないものではなかった（図1）。また、協調的な行動を引き出す契機としての役割も十分に果たしているように思われた（図2）。

幼児は年齢の高まりと共に、同クラス児とのかかわりから同年齢の他クラス児へ、そして同年齢児から異年齢児へと、少しずつ社会的な広がりを持ち、その関係を徐々に深めていく様相も確認された。その過程で、自我の芽生えが見られるようになり、精神的にも自立していく。つまり幼児は、生活を取り巻くさまざまな活動による人との接触を契機として、人とのかかわりの密度を濃くしていくように思われる。こうした発達

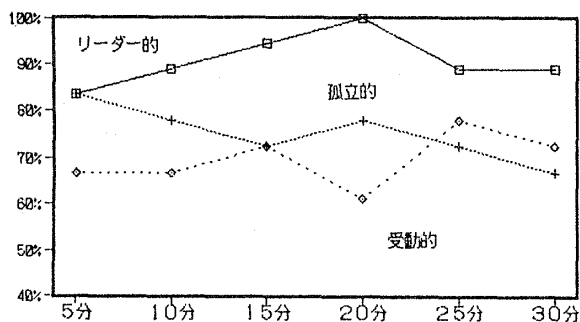


図1 「遊びの姿（没頭して遊ぶ）」の変容；4歳児

のプロセスは、リトミックは勿論のこと、砂場遊びやアスレチックでの人とのかかわりをみていく中でも観察された。すなわち、リトミックにおける人とのかかわり方のスタイルは、他の場面での遊びの姿と類似した傾向を示していた。このことは、幼児の生活の営みをトータルに捉え、多面的な活動を通して人とかかわる力を育んでいこうとする幼児教育の立場からして、むしろ好ましい結果と捉えることができる。

さらに、今回の観察で気付かれた点は、幼児の身体的な音楽反応を誘引することが、積極的な人とのかかわりを促すためにも重要となる、ということである。その身体的音楽反応を導く動因として、第一に挙げられるのは、そこで奏されている「音楽」そのものであるように思われる。すなわち、音楽によって内的欲求（inner drive）が刺激され、イメージが鮮明に描かれたとき、それは幼児の内的高まり（意志）の結果として、行動に反映される⁷⁾。この観点から、我々は、リトミックの過程で、音楽と動きの因果関係を見失わないようにし、かつ幼児にとって音楽が単調と感じ取られないようにすることが鍵となるように思われる。今後一層、リトミックが幼児の生活の中でナチュラルに感じられるように、幼児の好ましい人間関係を促す場として位置づけていくことが重要である。

〔注および文献〕

- 1) 國安愛子；乳幼児の音楽リズム指導（糸賀英憲編），北大路書房，12，1979，pp.76-79
- 2) Abramson, R.M.；Dalcroze-Based Improvisation, Music Educators Journal, 66-5, 1980, pp.62-68
- 3) マルタン他（板野平訳）；エミール・ジャック＝ダルクローズ，全音楽譜出版社，1977，pp.377-402
- 4) 望月悦子・川原明子；人とのかかわりを持つ力を育てる（対他），広島大学附属三原幼稚園研究紀要，1987，pp.24-37
- 5) 前掲書（4）で用いられた調査用紙に、若干の加筆修正を行い使用した。
- 6) 結果の詳細は、当日配布する資料を参照されたい。
- 7) 神原雅之・笹井邦彦；リトミックにおけるドラマの成立，ダルクローズ音楽教育研究，13，1988，pp.46-60

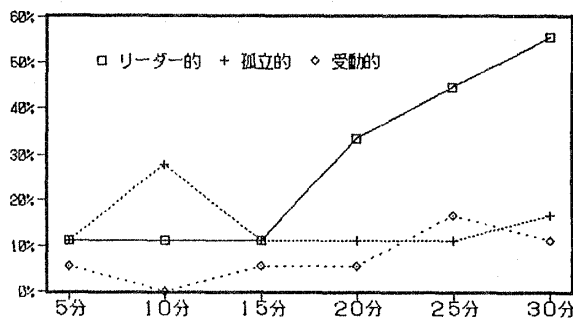


図2 「協調性の姿」の変容；4歳児